

本屋のいいところ

本屋は、売れそうな本を大量に仕入れて平積みします。実際に売れば更に追加注文し、広く展開します。本屋の店頭は、多くの人の関心を、社会の、世界の「いま」を映し出す劇場です。また、本屋は、これを売りたいという商品も厚く仕入れ、アピールします。店主やスタッフの個性や志向をそれぞれのお店で比較しながら味わうのも、本屋の楽しみ方の一つです。

図書館のいいところ

本には、品切れや絶版があります。本屋に並ぶ期間は、限られています。数年前に出た本でも、読みたい時には買えないことが、ままあります。そんな時、図書館が助けてくれます。テーマに沿って広く調べたい時、図書館はとてありがたいです。年代を越えた図書館の蔵書によるブックフェアは、本屋のぼくから見ても、うらやましい限りです。

思い出の1冊との出会い

『本は流れる 出版流通機構の成立史』（清水文吉著 日本エディタースクール出版部）最初は、出版業界の先輩から教えられ、お借りして読んだと記憶しています。日本近代の出版流通史の本で、戦中から戦後にかけての国策会社、日本出版配給株式会社（日配）に多くの紙幅が割かれています。権力がいかに出版物を恐れ、規制しようとしたかがよく分かります。書店関係者の座談会でその話をした時、会場の若い人たちが関心を示してくれ、うれしく思いました。何度か図書館で借りていましたが、どうしても持っていたくなかった時、既に絶版で出版元にも一冊も無いと知らされました。

泣く泣く、仇敵（？）アマゾンで買った、唯一の本です。

届いてみると、図書館の蔵書票がはがされたと思しき跡がありました。まさに、「本は流れる」です。

ジュンク堂書店難波店店長 福嶋聡

1959年、兵庫県生。1981年、京都大学文学部哲学科卒。1982年2月、(株)ジュンク堂書店入社。神戸、京都、仙台、東京を経て、2009年7月より現職。著書に「劇場としての書店」（新評論）「希望の書店論」（人文書院）「紙の本は、滅びない」（ポプラ社）「書店と民主主義」（人文書院）など

本屋のいいところ

本屋ほど入りやすくて、何も買わずに店を出ても全く罪の意識を感じない商売はありません。特に目的がなくてもふらっと入れる場。公園や広場同様、パブリックなのです。個人的にはあまり大きな本屋は疲れるので苦手です。

図書館のいいところ

図書館については詳しくないのでよくわかりませんが本屋同様ふらっと入れることが大事だと思います。開かれていること。本屋は買うという行為が伴いますのである種の緊張感が伴うかもしれませんが図書館にはそれがないのでしょいかね？丁寧になんでも相談に乗ってくれるスタッフがいるところは素晴らしいと思っています。

思い出の1冊との出会い

タフでウィットに富んだ？会話を操るロバート・B・パーカーのスペンサーシリーズが好きでした。自分にはないものにあこがれるのですね。この本以外でも一時期翻訳物の探偵小説、冒険小説を好んで読んでました。そこでバーに憧れを抱き、登場するお酒をよく飲んでいました。なんだかご期待に沿えずごめんなさい。

スタンダードブックストア 中川和彦

30数年前特段本好きでもない男が仕方なく父親の敷いた本屋行のレールに車輪を載せ動き出しましたが、ある日ずっと感じていた違和感が臨界点に達し乗り物を変えました。人と人をくっつけるのが好きです。

本屋のいいところ

様々な本が新陳代謝を行い、呼吸しているところ。

図書館のいいところ

物質として存在することによって、新しい出会いを生むところ。

思い出の1冊との出会い

あまり本を読まないお子さんのお母さんにご相談され、私が本当に面白いと思う本をお勧めしました。数か月後、驚いたことに、その本を読んだ子が、私に「この本面白かった！」と満面の笑顔で言いに来てくれました。書店員を20年以上しているけれど、本当に嬉しく、私にとって忘れられない一冊になりました。

講談社「どまんなか！」全三巻
須藤靖貴作

MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店 児童書担当 森口泉

1994年ジュンク堂書店神戸北町店アルバイト入社。天満橋店、難波店を経て、2010年より現在のMARUZEN&ジュンク堂書店梅田店に勤務。児童書担当。

本屋のいいところ

いろんな人に出会えるところです。本を書いた人（著者）、本を作った人（出版社）、本を届ける人（書店員）、本を読む人（読者）、一冊の本にかかわるすべての人が一堂に会して本の魅力を語りあえるのが何より素敵で、この魅力を店頭から伝えていければと日々試行錯誤しています。

図書館のいいところ

いま世の中に生まれた本がどういう経緯や歴史をもっているのかを教えてくださいるところです。一冊の本は、ただその本だけで島のように単独で存在しているのではなく、その前に存在した本や、その時代の言葉に影響を受けて山脈のように連なっています。そうした本そのものの歴史や生まれてきた流れを一望でき、実際に手に取れるのが何より素晴らしいと思います。

思い出の1冊との出会い

私の名前は、三砂と書いて、「ミサゴ」と読みます。地元の図書館で、英国の作家ロバート・ホールドストックの幻想文学『ミサゴの森』を見つけたときは興奮しました。自分の名前の本がある！！ミサゴは、ホールドストックの造語で、神話myth + 成像magoを足して作った作品の中の言葉ですが、個人的には英国人でも、ミサゴって言えるんだという驚きとともに、自分が知らないだけで本の世界の魅力は無限に広がっているのだと感銘を受けました。

梅田 蔦屋書店

人文コンシェルジュ 三砂慶明

こよなく本を愛しています。新しい本との出会いの場をつくる企画「読書の学校」を梅田 蔦屋書店にて、隔月で開催しています。NHK文化センター京都教室にて、「人生に効く！極上のブックガイド」を担当。実際に読んでみたら途方もなく面白かった本を『サンガジャパン』（サンガ）や、『WEB本がすき。』（光文社）などで紹介しています。